

# いわかづみ

令和七年九月 第二百一十号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(21)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑧ツエ)
- ◇ 方言一考(やつきり)
- ◇ モノいうもの(ピッケル)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(21)

上関城主三瀧氏の謎①

三瀧氏は、本当に

上関城主だったのか？

渡 辺 伸 栄

高野山文書の謎、小林弘さんの疑問

弘法大師が今も生きて居られるとされている  
あの高野山に、清浄心院という寺がある。越後  
にかかわり深い宿坊のようで、万延元(一八六  
〇)年、伊勢・金毘羅参りの上関村孫三郎一行は、  
ここに宿泊している。

中世の越後の人たちも大勢、この寺に物故縁  
者の供養を依頼していて、その名簿が残ってい  
る。高野聖(ひじり)と呼ばれた僧が各地を勧  
進して回ったらしい。その名簿の中に、シバタ  
のミツマ、中ノ目の水間、荒川の三瀧、さらに  
は中ノ目の三瀧出羽守が出てくる。すべて三瀧  
氏のことだ。

本紙の執筆を長く担当していた小林弘さん  
は、連載最終回の令和二年七月発行第81号に、  
この高野山文書の水間氏と新発田市の中ノ目に  
ある水間出羽守の碑文についての考察を載せ、  
そのあと、私にメールをよこした。

そこには、三瀧氏が新発田の中ノ目に居たの  
は明らかだから、新発田市荒川にあった荒川城  
が三瀧氏の城で、上関城はちがうのではないか、  
という根本的な疑問が書いてあった。

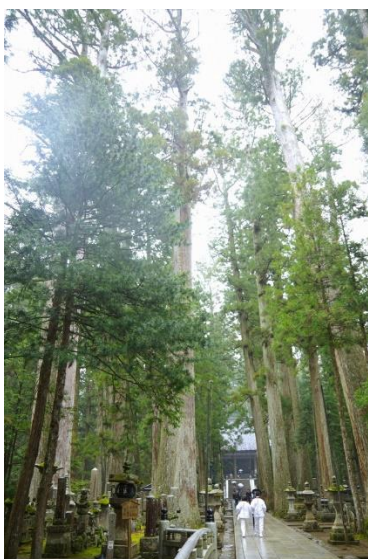
確かに、米沢藩士となった三瀧家の家系書に  
は、越後での居城は荒川城だと書いてあって、  
上関や関の字は全く出てこない。しかし、『関川  
村史』だけでなく村発行の各図書は、三瀧氏の  
城は上関城だと、さも自明のことように扱って  
いる。

これらの図書はすべて、三瀧氏が鎌倉時代に  
上関にあった桂の関の関所役人に任じられた  
ことを話の前提にしている。だから、三瀧氏の  
居た荒川城が上関城なのは当然のことで、証明  
は不要とばかりにスルーしている。

しかし、そもそも桂の関への赴任そのものに  
ついての根拠史料などどこにも示されていな  
いのだから、小林さんが、三瀧氏上関城主説を  
疑うのも、もつともといえbaumもつともなのだ。  
さて困った。小林さんの言う通りなら、上関  
城の歴史が根本から覆る。これは大変と、小林  
さんの連載に続く私の連載初回(本紙第82号)  
に、取り急ぎ反論を載せた。

三瀧氏の所領は広く坂町や中ノ目、そのほか  
各所にあった『色部史料』『県史資料編』他。  
守護代官としての三瀧氏の管轄範囲は下越一  
帯に広がり、居城は上関城でも、中ノ目に管轄  
拠点があってもおかしくはないのだ。

とは言うてみたものの、肝心の荒川城が上関  
城である直接的な証拠は提示できなかった。



高野山奥の院に巡礼姿二つ 2013年3月

細々と証拠探して、江戸時代の書物へ

小林さんからのプレッシャーもあって、その  
後も細々と証拠を探してきた。最近になってそ

れらしきものが見つかって、本紙前号で紹介したのが昭和三年発行の書物。しかし、これも残念なことに、最後の城主三瀧左近助の時代から三百三十年も経った現代の本。その上、出典もなければ、左近を右近と間違えていて、証拠としては少々弱い。

江戸時代の書物『越後野志』にならあるのではないかと期待はしていた。著者は水原町の小田島允武(のぶたけ)という書籍商。越後の自然・地理・産物等々あらゆる知識を網羅した地誌書で、文化十二(一八一五)年に完成、全二十巻の労大作。県立図書館でデジタル化されていて、家に居ながらパソコンで読むことができる。

だが、大作でしかも紙の本のようにパラパラとめくるわけにはいかず、本紙前号の時点では、証拠を見つけることができなかった。

それが最近、ようやく見つけた。第十六巻に越後の古城が列記してあって、そこに上関城の記述があった。「上関駅の山足丘に在りて番城也 水間左近 城代と為し居守す」と。

意味はこうなる。「上関宿の山裾の丘にある番城で、水間左近が城代として守備のため居城にしていた」。番城というのは、持ち主が他にいて家臣に番をさせる城のことで、番につくのが城代。前回紹介したように、上関城は上杉景勝に没収され、左近助は一度解雇後の再雇用。父

の城上関城の主に復帰したとはいえ、形の上では、持ち主は景勝でその城代とみなされていたことになる。

『越後野志』は、昭和三年の本より百十三年も古い。とはいえ、左近助の時代からは二百七十年も後になる。同時代史料というわけにはいかない。

ただ、大里峠開削が大永元(一五二一)年とされている根拠は、享和元(一八〇一)年出版の『米沢里人談』という書物で、これも二百八十年も後になる。『越佐史料』から)

どちらの書物も、江戸時代に地元伝えられてきた話を収集・記録したもの。大里峠の開削は、米沢の人々にとつては越後との交通が格段に便利になった話だから、ずっと伝えられて来ただろう。

上関城は、左近助が小国へ移ってから廃城になったが、それ以前は、三瀧氏及びその家来衆と上関村の人々は濃密にかかわって暮らしてきたはず。だから、二百年とはいえ、伝えられてきた話の信ぴょう性は高い。

### もう一つ、証拠が身近にあった

これで証拠は十分だろうと安どしていたら、なんと私の本棚の中にもう一つ証拠があった。何気なくパラパラとめくっていた『近世関川郷史料二』その二五五頁、赤谷村の「慶長二年(より)領属記録」という表題の新野家文書。

慶長二(一五九七)年から明治五(一八七二)年までの領主が記録されている。代々の水原代官の氏名もあって、村広報紙八月号で取り上げた大草太郎左衛門の名もここにあった。

赤谷村のその文書の冒頭には、慶長二年の領主が書いてある。越後全体の領主として高田城の長尾越後守景勝、それに続けて、岩船・北蒲原郡内の城と城主名が列記されている。その中に「上関村 平山城 番城也 水野間左近」とある。何故か水野間となっているが、三瀧左近助のことだ。つまり、景勝が会津に移封される前年の慶長二年には、三瀧左近助が上関城にいたことが記録されている。

慶長二年時の岩船・北蒲原の大小の城と城主がすべてきちんと記録されているので、おそらく、その元となった文書などがあったのだろう。『越後野志』も単なる聞き取りではなく、そのような記録文書などを収集して整理したもののようだ。だから、どちらの証拠もかなり確実性は高いとみてよい。

ということ、三瀧左近助が上関城に居たことは、まず確定としてよいだろう。

### 荒川城は上関城

三瀧家の家系書には、左近助もその父出羽守もそのまた父の掃部介(かものすけ)も、居城は荒川城とある。左近助が上関城に居たのだから、この三人の居た荒川城は上関城ということ

になる。

以上で、高野山文書から始まった疑問に、どうにか答えることができた。あれから早や五年、小林さんはお元気だろうか。

## 民具が語る生活史 ㊤ ツエ(杖)

8月の美術館巡りでは屋根の改修工事を終えた羽黒山五重塔を訪れました。駐車場から五重塔までは徒歩での移動です。参加者の方には「必要な方は杖・ストック等お持ちください」とお伝えしました。健康登山や古道歩きの参加者にはおなじみのアイテムですが、美術館巡りで要項に書いたのは初めてだったかもしれません。

ツエは、「物の運搬時や、老人・盲人などが支えに用いる棒。徒歩が中心の時代には旅の必需品だった」(P.356『日本民具辞典』)とされています。ドイツ語では「ストック」、英語では「ステッキ」です。ステッキと聞くと英国紳士が想像されますが、護身用としての機能もあつたようです。確かにイギリス人探偵のホームズは日本格闘術<sup>☆1</sup>「バリツ」を習得しており、敵と戦う際にはステッキを武器として使用します。

民具としてのツエの解説は「…信仰に関わる登山では金剛杖(こんごうじょう・こんごうづえ)などと称した。…杖は歩行を助ける日常的な用具であるが、同時に神聖なもの、呪力を持

つものと考えられていた」(P.356『日本民具辞典』)と続きます。『図説民俗探訪事典』には、「…稚児行列の杖、山伏の金剛杖、僧の錫杖、祭りでつかう<sup>☆2</sup>卯杖(うづえ)などは、神の依代(よりしろ)とされた」(P.247-25)とあります。

では、「金剛杖」とは一体どのようなものでしょうか。大阪や佐渡の金剛山、高野山金剛峯寺のように、金剛という名前は山や寺名、山号などに多く使われています。金剛石はダイヤモンドを指しますが、原義は「最も硬い石」です。性質が堅固で壊れないので、最上・最勝の意味に使用され、特に密教の言葉に用いられるようになりました。例えば密教である真言宗や天台宗では金剛杵(こんごうしよ)という法具が用いられます。金剛杵はもともと古代インドの武器で、後に密教で煩惱を打ち破る象徴として用いられるようになりました。形状により独鈷杵(とっこしよ)…両端が尖った短い棒状のもの、三鈷杵(さんこしよ)・五鈷杵(ごこしよ)などがあり、密教に傾倒した後醍醐天皇には五鈷杵を手にした肖像画が残されています(イラスト参照)。そして「金剛杖」は、この中の独鈷杵を擬したものと考えられます。

羽黒山麓のいでは文化記念館では実際に「金剛杖」が貸し出されています。私たちが羽黒山を訪れた際も、金剛杖を突いた方々が山頂を目指していました(写真参照)。

五鈷杵



また、四国八十八箇所巡り(お遍路)の装束には菅笠とツエが欠かせません。このツエは弘法大師の化身と考えられ、丁重に扱うものとされています。またお遍路中に命を落とす可能性もあつたので、どこで命が尽きてもいいようにと、卒塔婆の意味があつたともいわれます。

このようにツエには山歩きを支える道具としてのみでなく、信仰と深く繋がった一面がありました。

現在、当館村民ギャラリーでは「飯豊の系譜」この山と共に歩んだ岳人展」を開催中です。飯豊山は古くからの信仰登山の面影を残しています。飯豊の魅力、岳人との関わり、関川村の岳人たちの活躍をぜひご覧ください。(神田)  
<sup>☆1</sup>バリツは架空の日本武術です。その正体を巡っては、「柔術」や「バーティツ」など様々に議論されています。<sup>☆2</sup>卯杖(うづえ)は正月初卯の日に、魔除け・邪気除けとして用いる杖です。桃・梅・柳などの木を5尺3寸に切り、2、3本ずつ5色の糸で巻いたもの。上賀茂神社の卯杖神事が有名です。

### 参考文献

大島暁雄他著1983『図説民俗探訪事典』山川出版社、日本民具学会編1998『日本民具辞典』ぎょうせい





## 方言一考・やつきり

「やつきり」は「一生(所)懸命に、無心に、一途に」という意味の方言だ。「躍起(やつき)になる」という「躍起」が元になっていると思われる。「ゆつくり」「たつぷり」「さつぱり」「しつかり」のように「〇つ〇り」の形の副詞は数多くあり、それに倣って「躍起」に「り」が付いて使われるようになったのではなからうか。

「やつきり」の大御所Kさんは、暑さが緩み始めたこの頃は早朝から薄暗くなるまで荒川台の芍薬園にまた入り浸りになっている。花はとうに終わっているが、はびこった草を取るのにやつきりなのだ。盛夏でも熱中症に注意しながら通っていたが、草というのは無尽蔵に生えてくる。対抗するには「やつきり」しかない。道の駅の車の番号調べもゴミ拾いもやつきり、喋るのもやつきりで、半端な事ができない性分らしい。現在開催している企画展「飯豊の系譜」この山と共に生きた岳人」に彼の若い頃の写真があるが、昔は登山にやつきりで、人類学者で登山家の今西錦司と多くの山に同行している。その「やつきり」が好まれた珍しい例だ。いろんな「やつきり」があつて嫌われたり好かれたりするが、草取りやゴミ拾いなら文句の言われようもない。そんな評価のされない事にやつきりになって齢八十一の秋が始まろうとしている。(安久)

## モノ言うもの・佐藤又助のピッケル

開催中の企画展「飯豊の系譜」の資料の中に佐藤義和家に伝わるピッケルがある。伯父の佐藤又助(明治三十二年生)の遺品である。スイス製の名品であることと、榎有恒(まきゆうこう)から貰った、ということとで関川村の岳人には有名なピッケルなのだが、その由来は良く分かっていない。展示するにあたり、又助が登山を趣味としたことや慶応大学卒である事など所有者にお聞きし、榎との接点が推測できた。榎は慶応在学中に登山部を創設したが、その三年上に又助がいる。榎は卒業後渡欧して近代登山を学び、日本に広めた人物で日本山岳会の創設者である。世界で初めてヒマラヤのマナスルに登頂した日本隊の長であり、この快挙は戦後の日本に限りない勇氣と自信を与えたと言われている。マナスル遠征に際し、榎は関係者に寄付を募る手紙を送っているが、その中に又助がいて、それに応じた礼としてこのピッケルを贈ったのではなかったかと推測できる。当時ピッケルは登山家の魂とまで言われたが、重く長い木製の柄のピッケルを冬山で見かけることはなくなった。榎の活躍、深田久弥の著作で登山ブームとなった時代の懐かしい逸品である。(安久)



## 歴史館行事の報告

○夏の美術館巡り ①会津さざえ堂・野口英世記念館 7月19日(土)・参加者22名 ②羽黒山五重塔・オランダせんべいファクトリー 8月2日(土)・参加者23名

○第2弾 古い映像放映会 8月23日(土) 関川村山の会会長、平田大六さんに解説していただき飯豊縦走の記録☆「飯豊の山旅」を観賞しました。

○歴史講座① 9月24日

(水) 講師…関川村歴史文化財調査委員 佐藤忠良さん 『女川の歴史』から学ぶ」を行いました(写真)。

○秋の健康登山「蔵王山」

9月27日(土) スタッフ・参加者27名

○古文書解読講座(7・9月)

惣代庄屋交代願い・宿場間の争いの文書を読んでいます！

### お知らせ

○「飯豊の系譜」この山に育てられた岳人展」開催中！ 会期…12月7日(日)、10時～16時、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。  
☆「飯豊の山旅」随時放映しています。

いわかがみ 第百二号

発行日 令和七年九月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300

